

交換留学プログラムにおける対面クラスからオンラインクラスへのチャレンジ

Report of the Change from in-person Japanese Classes to Online Classes at Center for International Education in Japan

鹿浦佳子, 関西外国語大学

Yoshiko Shikaura, Kansai Gaidai University

1. はじめに

関西外国語大学（以後「本学」）留学生別科は、2020年の春学期、通常通りの教室活動でスタートしたが、新型コロナウイルス感染の拡大とともに、学期途中急遽遠隔授業（以後「オンラインクラス」）へと切り替えられた。2020年秋学期、それまで当然のように行っていた留学生の受け入れが中止に追い込まれ2022年春学期までの2年間オンラインクラスを行った。ほぼ全てのコースを開講、全教員のコマ数を維持しながらこの状況を乗り切った。本稿ではこのオンラインクラス履修移行の実態とアンケート結果を分析し、約2年間のオンラインクラスの状況や対面クラスとの差異、長所や問題点などを留学生別科全体の視点と日本語プログラムの視点の両方から報告する。日本から海外の学習者にオンラインクラスを offer する場合の時間割、教員のコマ数、単位付与、授業料、学生が望む同期型授業/非同期型授業の割合、学生に行った満足度調査の結果などについても報告する。

1.1 本学留学生別科概要

本学は、世界55か国8地域395の大学と交換留学の提携を結んでおりコロナ禍以前では毎年約700名の留学生を受け入れていた。日本語総合クラスを含む日本語関連クラス44コース、講義形態のアジア関連科目のクラスが25コースある。日本語総合クラスは必須科目で1コマ90分週3回のクラスがあり、他の日本語関連科目、アジア関連科目は週2回の選択クラスである。1学期は15週間からなり、春学期は1月末に始まり5月中旬に終了、秋学期は9月から12月中旬までの期間である。

1.2 2020年春学期のオンラインクラスへの移行と実態

2020年の春学期、通常通りの教室活動でスタートしたが、新型コロナウイルス感染の拡大とともに、学期途中急遽遠隔授業（以後「オンラインクラス」）へと切り替えられた。急遽、翌週から対面クラスをやめ2週間非同期型授業オンラインクラスに切り替え、春休みの後全面同期双方向型授業（synchronous）と非同期型授業（asynchronous）混在のオンラインクラスに移行した。留学生の半数

は帰国したが、帰国後も多くが履修を継続し、日本に残った学生もオンラインクラスを取り、大半の学生が日本語クラスを修了する結果となった。

大学側はビデオ会議ソフトウェアの Zoom を取り入れてクラスが行えるように準備し、春休みを利用し教員の研修を行った。教材などの公開、課題の提示、提出、添削、採点、成績付け、試験の提示などは、本学の学習管理運営システム (LMS=Learning Management System) Blackboard を活用することにした。

2020 年秋学期、本学に留学を希望していた学生数は相当数いたが、パンデミックの状況や留学生を本学キャンパスに受け入れることは難しいと判断し、留学生別科は Studio (実習) コースを除く全てのクラスにオンラインクラスの実施を決定し、2022 年春学期まで継続することになった。オンラインクラスへの履修者の周知獲得は容易ではなかったが、これにより非常勤講師の契約解除をすることもなく教員の担当コマ数も従来通り維持することができた。

原籍大学のクラスを履修しながら本学のオンラインクラスを最大 2 コース取れるというパートタイム制度を取り入れた。初めての試みであるため授業料を無料とし、登録料のみを徴収した。

時差を考慮して、北米や中南米やアジアの大学を対象に 1 限 (日本時間 9:00~10:30) か 2 限 (10:45~12:15) を、ヨーロッパ、アジアの大学対象には 4 限 (15:00~16:30) か 5 限 (16:40~18:10) という時間割を設定した。時間数 カリキュラムも対面クラスと遜色なく提供出来るということを確認の上、単位も付与することにした。日本の対面の時間割に合わせると国により現地時間の夜中にクラスを取るようになるので、これを防ぐために開講するクラスの時間割が朝か夕方かに限定した。

数多くのコースを限られたコマの中でバッティングしないように履修できるようにするため、アジア研究関連科目は同期型授業と非同期型授業を週 2 回のクラスにおいて 1 クラスずつ設置することにした。学生との会話が必須の言語教育である日本語クラスは原則同期型授業にし、漢字クラスにおける漢字の導入や日本語総合クラスにおける文法説明などをオンデマンドで行うという非同期型授業も教員の自由裁量で併用可能とした。教員は午前中と午後同じクラスを異なる地域の学生向けに 2 回行うことになり、3 限はクラスがないというサンドイッチ状態の担当時間割となり教員の労務環境は朝と夕に集中する極端なものとなった。また選択科目の日本語関連科目も担当している教員は日本語総合のクラスと異なる曜日にクラスが入り、月曜から金曜まで毎日クラスを担当することになり研究日がなくなってしまった。

対面クラスでは留学生別科で取っているクラスや国際寮の「YUI」、クラブ、サークルなどでキャンパス内での日本人学生との交流が容易に出来ていた。それに対しオンラインでは日本人学生との交流が出来ないため、従来留学生別科が対面で実施していた多文化交流プログラム (スピーキングパートナープログラムなど) の代替として、学生主体で発案・企画する新規プログラム Intercultural Engagement Program (以後 IEP) をオンラインで実施し、本学の学生と海外の学生が交流できる機会を提供することにした。日本人学生と留学生が協力し合って沢山のイベントを企画運営し交流が盛んに行われた。

1.3 オンラインクラス移行による学生数・国数・大学数の変化

対面クラスとオンラインクラスを比較するためにオンラインを開始する以前の2019年春学期から、2022年春学期までの学生数・国数・大学数のそれらの数値を比較した。

対面クラス時に比べ、大学数は減少したが、学生数、国・地域の数は差異がなかったが、学生数の確保は交換留学生に限らず卒業生の受け入れも許可し、結果として留学を希望している学生のみならず、学びたいが時間的・経済的に留学出来ない、仕事などがあり時間的に対面クラスが取れないという提携校の学生の希望を満足させることができた結果である。対面時では出来ないオンラインクラスでこそ出来たことである。

2. 留学生別科による学期中間アンケート調査

2.1 調査時期・方法

オンラインクラスになり、留学生別科は学生の意見やリクエストを尋ねるべく学期中間アンケートを行いデータをまとめた。毎学期学期末に教務部により行っていた満足度アンケートのデータも参考にする。

2.2 別科全体のアンケート調査とその結果

2.2.1 オンラインクラスの良い点、悪い点

本学のオンラインクラスの履修するいい点として、一番は本学の教員の質が高く日本語、日本関係に精通した教員から学べるという意見であり、続いて自国にないクラスで専門の教員から学べるという評価が多かった。対面式の代替案として受講できる、自分のペースで学べると続いた。対面式の留学を計画していたが、それが中止になったための代替策として履修しているという学生も多い。日本語に関しては自国に日本語プログラムがないための履修、日本語教員の質が高いからだという答えに続いて、自国にしながら日本語の単位が得られる利便性があるという意見もあった。悪い点は、クラスメイトとの交流が限られているという意見が一番多く、他には時差があるためクラスの時間が早すぎる、遅すぎる、日曜日の夜にもクラスがあるという時間割の問題が続き、モチベーションを維持するのが難しい、教員への質問することや教員からの回答を得るのが難しいという意見が続く。

2.2.2 オンラインクラスで想定される問題と対策

オンラインクラスで想定される問題点（教員とのやりとり、クラスメイト間でのやりとり、課題の出され方、課題・試験の採点と返却、教員のZoomの操作、質問や要求への教員の対応）についても学生に評価を尋ねたが、どの学期も満足以上が95パーセント以上であった。

対面式では学期始めの2週間は履修辞退が認められたが、オンラインクラスでは履修辞退の期間が学期終了まで延長された。学生はパートタイムであるため自国の大学や仕事が忙しくなったり、単位がもらえないことがわかったり、時差の問題や思った以上にクラスが大変だと分かったという理由での履修辞退が多く、

各学期全体数の約 1 割を占めた。その結果対面クラスより小さいクラスサイズが更に小さくなるという問題も起こった。

教員は Zoom やメールを使って学生との綿密なやり取りを行っており、学生の質問や要求に応えるよう努めていたが、クラスメイト間のやり取りの満足度は平均 88 パーセントと他の項目に比べ低く、課題の出され方、課題及び試験の採点と返却に関してはまだ解決すべき問題があるようだ。

オンラインクラスでは、日本人学生との交流が少なくなるという問題解決のためのクラス外の IEP に関しても意見を聞いた。自国から日本人との交流が SNS など気軽に行えるということで、実際参加した学生からは常に評価が高かった。

3. オンライン日本語プログラムの評価と問題点

3.1 日本語の満足度アンケートの結果

日本語プログラムの調査においては同期型を好む学生の割合が 8 割近くで、同期と非同期型の混在を好む割合は 2 割であるという結果であった。これに比べて、講義型形態のアジア関連科目では同期型と同期非同期混在型を好む学生の割合が 3 対 7 であり、語学の日本語クラスと講義型形態のクラスの同期型と同期非同期混在型に対する学生の意識は逆転している。

オンラインクラスの時間は対面クラス同様 90 分であるが、日本語のオンラインクラスの時間についての意見を聞いたところ半数以上が 90 分で満足している。中にはもう少し短い時間が好ましい、また自国のクラス時間の 60 分を望む学生もいた。

3.2 教務部による日本語クラス満足度アンケートの結果と分析

本学では、毎学期教務部により学期末に留学生への満足度アンケートを行っており、対面授業である 2016 年秋学期から 2019 年秋学期までとオンラインクラスが始まった 2020 年春学期から 2021 年春学期までの日本語コース全体の評価を比較した。その結果オンラインクラスでの回答率は約半数と非常に低いが、肯定の評価の数値はコロナ禍以前のそれと大差なく逆に数値が高い学期もあり、課題はあるものの一定の評価が得られたと考えられる。

3.3 オンライン日本語プログラムの問題と工夫・改善策

オンラインクラスでは試験の際、カンニングなどの不正な行為がチェック出来ず、学生への平等かつ客観的な評価をするのが難しい。その対処として試験の時はカメラを on にさせたり、人に聞いたり調べたり出来ないよう時間制限を設けるなど工夫した。不正が出来ないように携帯カメラで学生の手元や周りを写させる教員もいた。しかし、そのような強制が出来ない状況もあり、個別対応の試験をすると時間がかかり、対面式ほど試験の回数が取れず、平等かつ正確な評価という目標にも限界がある。全体的に従来の対面式のクラスより成績が良くなっているということも否めない。

出席に関しては、パートタイムであるため自国の大学のクラスを優先しなければならない、アルバイトや仕事がある、国や天候や住居によりネット環境が悪

い、コロナ禍での事情でクラスに出席できないなど、様々な理由を考慮した結果、欠席した分を成績点から減点することは行わないことにした。言語のクラスの場合、特に初級中級のクラスでは出席することで知識の理解度、練習の効果があがり、上達することに繋がり、出席しないと成績にも影響を及ぼすため、欠席を減点方式にしなくても出席する学生が多い。しかし、上級の場合、一定以上の日本語の知識がある学生は、欠席しても試験である程度の成績が取れてしまい、学生の上達度や努力を忠実に成績に反映させるのは難しい。

オンラインクラスにおける同期型クラスと非同期型クラスの問題は、日本語クラスの調査では同期型クラスの方が多くの学生からの評価が高かった。その理由は、分からない時や質問がある時、すぐ教師からフィードバックを得られ、教師や友達ともたくさん練習ができるなどである。したがって、個々の学生の意見も取り入れながら、現状維持で問題ないようである。筆者個人は、毎回同期型の Zoom クラスを行い、そのクラスを録画して Blackboard にアップロードするようにしている。休んだ学生や再度 PPT を見て練習したい学生は、好きな時間に録画された非同期型クラスも体験できる。教員も余裕を持ってクラスを運営できるのではないかと考える。これに対して講義型のアジア関連科目クラスでは同期型より同期型と非同期型の混在の混在型を希望する学生の割合が多かった。実際にどのようにクラスが行われたかを聞くと同期型・非同期型の割合が学生の希望の割合とほぼ同じに行われていた。

クラスの長さについては、コンピュータに向かって授業を受けるというオンラインクラスの性質上、多くの学生が連続して集中できる時間はせいぜい 60 分で、90 分クラスには途中 5 分程度の短い休憩がほしいという意見が多かった。本学のカリキュラム上、1 コマの長さを変更するのは難しいが、学生の希望のように 90 分のオンラインクラスでは間に 5 分程度の短い休憩を入れると更に集中できる学生が多くなると思われる。

対面クラスで作られているオフィスアワーはオンラインクラスでは、時差の問題があり、かつ設定しなくても教員は必然的に連絡、相談、質問への回答を行っており形式的なオフィスアワーと同等以上のタスクを負っているため、設定しなくてもいいと考える。日本語クラスの場合 対面式では 留学後に行えばよかった placement test を事前にオンラインで行う必要があった。その問題・方法については紙面の関係で割愛する。

4. 結論

コロナ禍以前、1 学期にキャンパスに受け入れる学生の国数は平均 29 カ国、大学数 150 校、学生数は平均 312 人であった。オンラインでクラスを開講しても提携校自体にクラスがあるのであれば、果たして外大のオンラインクラスを履修する学生がいるのだろうかという不安があったが、開講してみると不安は払拭され、クラスサイズは対面式に比べ小さくはなったが予定のコースを開講することが出来た。平均国数は 25 カ国、大学数 100 校、学生の数は対面の時を凌ぐ 345 人である。海外の学生からは普段履修出来ないクラスをオンラインで取ることができ感謝しているといった意見が多く、留学できない代わりに単位付与のクラス

が安価な授業料で履修できてよかったという意見も見られた。時間割は時差があり原籍大学のクラスがない時間割を選んだため、本学教員の労務体系に大きく影響し負荷をかけることとなった。また日本にはないサマータイムを導入している国では学期途中でクラス開始時間が変わるので学生への注意喚起が必要である。

授業形態として、同期型・非同期型のどちらが教育的に有効かという問題に対しては、語学のクラスでは同期型のクラスの方が望まれており、語学以外のクラスではオンデマンドで予習をした後クラスでの **discussion** を行うという反転授業の評価が高かった。本学では実際に同期型・非同期型の割合がそのように行われており学生の満足度も高かった。

オンラインクラスでは日本人や日本人学生との交流機会が少なくなるというのは予測されていたため予防策として本学独自の **IEP** という留学生と日本人との交流を設定した結果、参加者の数も多く双方から高い評価を得た。この **IEP** の運営に関わった日本人学生は本学の英語スペイン語中国語を専門とした日本人学生の協力によるものが甚大である。

クラスの時間は、コンピュータの前での学習は対面の時より集中するのが難しく途中休憩を設けた方が勉強しやすいという意見が多かった。アンケートでは特別に指摘された問題点はなかったが、学生同士の交流を増やす工夫がほしいという意見が他の項目より多く見られた。

語学のクラスに関しては、学生を評価するにあたって対面とオンラインでは試験の方法、数が異なるため、評価の統一性が取りにくい、オンラインでは試験で学生が **cheating** を行っていないかという評価の公平性の課題がある。交換留学における語学の一番の課題は公平で効果的な **placement test** をどう行うかである。

コロナ禍で国際交流事業が難しい局面を迎え、本学においても多難であったが、オンラインのクラスを開講して良かったという思いである。オンラインのメリットとして、全てに忙しくなった現代社会において通常でも留学する時間が取れない、また経済的理由で留学が困難になったという学生にとって留学する代替策となる。また日本に興味があるが留学することに高いハードルを感じている学生はオンラインクラスを取ることで留学への準備コースとなる。交換留学を終えた提携大学の卒業生への再教育も可能となった。

当初は交換留学プログラムの代替えとしてオンラインの導入を行ったが、アンケートの結果を見る限り、物理的に留学できない留学生のサポートとしてオンラインでの質のよい教育や異文化交流が提供できたのではないかと実感する。オンラインクラスの利点を考慮し、今後もオンラインクラスを留学プログラムの一選択肢として引き続き実施することを決定し、今後も並行して行っていく。